

# ライフサイクルの構造について

—— 三次元モデル ——

井 上 道 雄

はじめに —— 16才と17才と50才

16才で死を受容した少女の話を、日野原氏（1983）が書いている。まだ駆け出しの臨床医の頃の苦い体験として。紡績工場の女工であった少女は、結核のため大学病院に入院していた。結核に絶大な威力を示した抗生物質ストレプトマイシンは、当時（昭和12年頃）はまだ開発されていなかった。そして、効果的な治療法もなく死を迎えるに至った。臨死に際して、死を受容した少女が氏への感謝と決別のことばを述べたのに対して、若き医者であった氏は、「しっかりしなさい」と励ますばかりであったと言う。そして今、「安心して成仏しなさい」と言わなかったこと、「脈をみるよりも、どうしてももっと彼女の手を握っていてあげなかった」のかを思い、死を受容し、死と対決することの難しさと、必要性を説いている。この話は、すぐれて個人的ではあるが、決して特殊なケースではないだろう。

山田かまち詩画集（1992）の後書きに、短い年譜が添えられている。1960年に高崎市に生まれ、1977年エレキギターの練習中に感電死するまでの17年である。その間に多くの水彩画とデッサンと詩を残した。それらは、見られることや読まれることを意図した作品ではない。彼の死後、処分される予定であった作品が、その才能を見抜いていた、絵や詩の指導者である先生や友人たちによって、お別れの意味を込めた展覧会が催された。そして、展覧会場の所有者であった画商は、かまちの作品に強い衝撃を受け、彼の名前を冠した「山田かまち水彩デッサン美術館」を建設した。何という好運であろう。何というかまちの才能であろうか。

詩画集の編者であるなだいなだ氏は、かまちの作品の天才性を讃え、17歳で短いその一生を閉じたが、その年齢のもつ開放性と永遠性を次のように意味づけている。

「15歳も16歳も17歳も、大人にはあくまで通過点にしか過ぎないのだ。・・・今時の大人のなかに、17歳が、人生の中のかげがえのない一年だ、と考えているものがあるだろうか。しかし17歳で死ぬ人間もいる。その人間にとって、17歳は絶対的な一年だ。18歳の一年前でも、22歳の準備のための一年でもない。人生最後の一年だ。それで完結すべき一年だ。」

多くの若者が美術館を訪れ、彼の作品からのメッセージに激しく心を揺さぶられる。「かまち現象」と言うらしい。

『「死の医学」への序章』（柳田、1986）は、2年7ヶ月にわたるガンとの闘いの末、50歳で

世を去った精神科医西川喜作氏のドキュメントである。多くの手記に共通して言えることであるが、若くして「死に直面」した人びとの残余の人生（日々）の充実ぶりである。現代の「死の病」は、予期もなく日常的な生活の中で突然に告げられる場合が多い。本人は無論のこと周りの者にとっても、死への準備期間が短いことが、病気への怒り、悲哀、喪失感を強める。しかしその様な中で、闘病記の多くで語られているように、強い意志でもって自らの人生を完成させようとしていることが窺える。

ここにあげた三人は、病気と事故によって突然に人生を断ち切られた人たちである。しかし、それぞれの人生へのかかわりは、暦年齢をこえて充実と成熟を成していると感じられる。生涯の完結は、多くの場合に、加齢による身体的な衰えのなかで死をむかえることによってなされる。だが、この三人のそれぞれにおいても、ライフサイクルは完結していると言えないだろうか。

個々人の人生への積極的なかかわりは、さまざまな次元をもつ構造のなかでおこなわれている。年齢、発達課題、慣習や規範、社会、文化、時代、歴史、文明といった個々人をとりまく顕在的・潜在的、意識的・無意識的、あるいは共時的・通時的な諸次元（レベル）との間にである。人間の生涯発達を考える上で、これらの次元を個々人の人生の全体像が把握できるかたちで、ライフサイクルとして構造化することが必要である。「個人の人生」を強調するのは、例えば、若くして死に直面した人びとの生き方をも、通常の人生（奇妙な言い方であるが）として、ライフサイクルの構造に取り込んで位置づけたいからである。それは、ライフサイクルの長さ（ライフスパン）を暦年齢にこだわらず、生きられた人生の質と考える立場から人間の生涯をモデル化する試みでもある。

本論は、まず1章で、従来のいわゆる発達段階理論を取り上げ、今日の生涯発達の状況にそぐわなくなっている問題点を検討する。一つは、固定的で閉鎖的な発達段階が、ボーダレス化する現在の発達状況から派生する問題を取り込めなくなってきたことである。いま一つは、それらの発達状況の背景にある、激しく変動している文明的過渡期と考えられる歴史的状況である。2章は、発達理論を人間の生涯を視野にいたした生涯発達理論（ライフサイクル論）として捉えることの必要性についてみる。また、ライフサイクル論として、世阿弥の『風姿花伝』を取り上げる。さらに、ライフサイクルの歴史的な相対性について検討する。3章では、ライフサイクルの開放性・柔軟性、つまり「開かれた」発達の特徴について、発達の「同時性」と「連続性」から取り上げる。そして4章で、ライフサイクルの3次元モデルを提唱する。

## 1 章 発達理論から

### 1. 発達段階理論の問題点

発達理論は、大きく二つの立場に分けられる（Levinson, 1978）。一つは、発達を階層的に捉えるものである。発達は、前段階から次の段階へと階段を上るように順次より高次のレベルへと進んで行くという考えである。これは、発達を科学的厳密さでもって数量的な方法で捉えようとする立場である。発達過程は、計測可能な発達特性を暦年齢に伴う変化として順序づけることである。従っ

て、数量的に単一な次元として発達のレベルが捉えられ、発達特性を個別的に分析したものとなる。コールバーグの道徳性の発達やピアジェの認知の発達がそれであるだろう。

これに対して、発達を能力の上昇とみるのではなく、平面的な発達順序と考える立場である。ただし、それぞれの発達段階は、独自の役割をもっており、欠かせないものである。従って、発達の全体像に留意した考えとなる。人間の一生を自我の八つの発達段階と考えたエリクソンのライフサイクル理論、中年期を中心として、発達を生活構造の変容と発展として捉えたレビンソンのライフサイクル論がそれである。

従来の発達段階理論は、発達の順序性・方向性を強調し過ぎる嫌いがあった。心身機能の特定の側面（身体的発達や心的諸機能——自我・認知・言語・社会性等）を取り上げて、各段階固有の構造と特徴、及び習得が次の発達段階への前提となる発達課題の存在に焦点が当てられていると言えるだろう。しかし、各発達段階の特質は、その発達期に固有の孤立したものではない。例えば、幼児期の認識様式の特徴である相貌的知覚は、メタファーやアニミズムとして大人の心性においても内在化した形で維持されている（野村・井上、1985）。

これらの発達理論、とくに階層的発達理論は、「発達の優劣」や「発達の進歩」や「発達課題の達成」といった、西欧の近代的自我の完成を思想的背景としている。それらの理論が、成人期前までを主な研究の射程にしていたのは、この上昇志向的で単線的な進歩思想の概念枠に、呪縛されていたためと思われる。それは、「発達の進歩」の考えに基づいて、発達段階と各発達段階における発達課題の習得によって、個人の発達水準を位置づけることが主要な目的となる。また、発達過程において、発達段階と発達課題のそれぞれに実際以上の断層をもたらしめているであろう。

## 2. ボーダレス化する発達段階

大学生の幼児化が言われ出してから、すでに久しい。また、性を扱ったポルノコミック誌の規制に象徴されるような、大人の世界の子どもへの浸潤が社会問題となった。

栗原（1989）は、このような現代の発達状況を、「子どもの大人化と大人の幼稚化が同時進行中」であり、現代の若い大人たちが、「幼児期のモードも青年期のモードもそして若い大人のモードも並列的に共存させ」ていると言っている。同様の指摘は、小此木（1989）によってもなされており、モラトリアムがアイデンティティ確立のための青年期に特有な一過性のものでなくなり、「現代人に特有の特質となってきたこと」を示している。

児童期に問題をとれば、それは「子どものプロ化」（東山、1990）といわれる現象であるだろう。有名大学を目指すために（その先にはいわゆる一流企業という目標があるが）、有名校への入学（幼稚園から）、それに伴う早期の学習塾通いなどである。そして、そこには教育の個別化も同時に進んでいる。

子どもたちの遊びの世界においても、同様のことが言える。かつての草野球、三角ベースといった子どもたちの「遊び」は、少年野球チームとして大人たちの指導により、しっかりした規律のも

とで練習がなされている。本来「遊び」は、活動すること自体が喜びと満足をもたらす自己充足されるものである。しかし、少年野球チームのそれは、「遊び」というより「練習」であり、やがては高校野球、その象徴である甲子園出場、そしてプロ野球といった未来（おとな）の舞台を心のなかに描きながら、まさに目標課題達成のための「学習」の一過程であるかのようなものである。

プロ野球では、「子どものプロ化」とは逆に「プロの少年野球化」が起こっているのではないだろうか。プロの選手であるならば、かなりの程度自律した練習やプレイをするものであると思われる。しかし実際には、キャンプから試合、そしてシーズンオフに至るまで監督、コーチの決めたスケジュールを規律正しくこなしている。これは、いわば野球技術という単一な次元で順序化されたことによるためだろう。そういう意味では、学習成績という単一次元のもとに大学や就職企業までもを序列化していることと同じであると言えるだろう。

「子どものプロ化」は、児童期における発達の特性と独自性を空洞化し、児童期そのもののボーダレス化をもたらしている。ウィン（1981）の言う、子ども時代が大人の世界からは独立していて、親が子どもを守る「保護の時代」ではなくなり、おとなの社会へはいるための備えをする「準備の時代」となっていることの現れであろうか。

青年期ならびに児童期からの問題提起は、各発達段階の境界をあいまいにする、段階間の相互浸透（Levinson, 1978）、つまりボーダレス化を示すものである。そして、発達段階の区分ならびにその概念について再検討を迫るものであるだろう。発達を誕生から死への一方向のみに考えるのではなく、その逆方向にも前後する場合があることも考慮する必要があるのではないだろうか。退行現象といった臨床的なケースを除いてもである。

例えば、河合（1992）は、「道徳性」のような人間の内面にかかわる発達課題は、身体や知能の発達とは質的に異なり、ある水準に達していても容易に逆行をおこすものであるという。このことは、「道徳性」のみに限らず、小刻みな逆行は、さまざまな発達課題で起こっているのではないだろうか。その一つの現れが、ライフサイクルにおけるいわゆる「危機」であると言えるだろう。

さて、このような発達段階のボーダレス化をもたらした原因の一つとして、近代都市社会における社会・文化構造の変容があげられる。いわゆる伝統社会や未開社会においては、イニシエーション（通過儀礼）に代表されるように、その集団の社会的・公的な認知のもとに発達段階が規定されている。そこでは年齢集団（男一老人集団・壮年集団・青年集団；女一姑集団・嫁集団・娘集団）による階梯制度が存在し、年齢集団間、即ちライフステージの移行が、共同体の中で明確な様式で行われ、そして共有されたものとなっている（島田、1993）。

しかし、近代社会は、わが国の成人式に象徴されるように、イニシエーション儀式の空洞化や消滅をもたらした。このことは、発達段階間の移行をあいまいなものにしている。発達過程を規定する文化・社会装置としてのイニシエーションの崩壊は、河合（1983a, 1983b）が指摘するように、イニシエーションを個人的なレベルでなさねばならなくなり、社会的で公共性をもった（社会規範としての）モデルの喪失をもたらしたと思われる。それは、エリクソン（1959）の「役割実験

(role experimentation)」をさまざまな発達段階で行うことによって、個々人が自分なりのライフスタイルを築いて行かねばなくなっている。それはまた、ライフスタイルの個別性と多様性を生み出している。

藤竹（1992）は、社会学の視点から、それはモデルの喪失ではなくて、モデルの否定、ダサイ役割を引き受けるのを拒否する“らしさ”の否定として、その積極的な側面に注目している。それは、社会的規範によって一方的に区切られたステージ、つまり社会的役割による「・・・らしさ」の拒否である。しかし、このイニシエーションの崩壊やモデルの喪失が、ライフサイクルにおける発達段階間のボーダレスを生み、従来の発達段階間の混乱をもたらしていることは明らかであるだろう。特に、多くの問題が生じている青年期において顕著に現れている。現代の青年の幼児化、成人の永遠の少年化（ピーターパン・シンドローム、シンデレラ・コンプレックス）、万年青年、＜若さ＞信奉等がそれであろう。

いづれにせよ、近代都市社会では、発達段階についての共同体として共有する概念が弱体化しており、ボーダレス化をもたらしていると言えるだろう。

### 3. 今日の状況からの要請

ライフサイクルが今日注目される背景には、いままでに述べてきた発達理論の問題点に加えて、以下のような時代的な状況があると考えられる。

まず暦年齢そのものの生物学的な変化である。平均寿命の急激な延長による社会の高齢化である。主に医療技術の進歩によつて、人間の一生であるライフスパンが、生物学的に長期化している。厚生省の発表によると、1992年の日本人の平均寿命は、男性が76.09歳、女性が82.22歳である（朝日新聞、1993）。これは、1947年の男性50.06歳、女性53.96歳と比べて、ここ45年間にライフスパンはほぼ50%も延びたことになる。また、高齢化は、65歳以上の高齢者が1,687万人で、総人口に占める割合が13.5%と過去最高になり、2021年には現在のほぼ2倍の3,275万人となりピークを迎えると予測している（朝日新聞、1993）。

人類が初めて手にした、ライフスパンのこの急激な長期化は、われわれにさまざまな生物学的、心理的、社会的問題をもたらしている。特にライフサイクルの後半の老年期において、医療、介護、尊厳死等のさまざまな問題を顕在化させる。また、長期化の影響は、女性のライフサイクルの変容において著しく、家族のさまざまな問題をも招来せしめていることが指摘されている（佐藤、1990）。それはまた、長期の人生の安定性は、人生の質（Well-Being）が問われる時代をもたらしている。

いま一つは、今日の時代が、社会構造や文明の大きな過渡期のなかにならることである（Bell, 1973 ; Toffler, 1980）。ベルによれば、資源の採集に頼っていた前産業化社会（農業社会）から、産業革命によってもたらされた産業化社会を経て、現代の社会は、脱産業化社会であるという。「もの」から「情報」への社会の基幹構造が移行しており、それにとまって生活様式が大きく変

わろうとしている。かつて農業社会から産業社会への社会構造の変化が、教育制度や家族構造を大きく変容させたようにである。この文明の大きな過渡期は、われわれに生活構造の改革をもたらすであろう。そして、ライフサイクルの見直しを迫るものと思われる。山崎（1984）は、現代社会が情報を中心とする知識集約社会と規定したうえで、自分自身の人生に目を向けた「ゆとり」の時代であることを指摘している。いづれにせよ現代の文明の大転換は、かつてないような生活様式の変化をもたらす、ライフスタイルの転換を迫っている。

以上にみてきたように、現代は、ライフサイクルの激動期、過渡期（とりわけ、「家族」と「女性」において）であるだろう。それは、ライフサイクルを旧来のように固定的に考えていたのでは、もはや現実の発達過程に対応できなくなってきたことを示している。われわれは、発達段階の期間や発達課題の内容について、ライフサイクルの再構成の必要性に迫られている。

## 2章 ライフサイクル論へ

### 1. ライフサイクルの定義

ライフサイクルは、人間の誕生から死に至るまでの生涯における身体的、心理的、社会的な変化の過程と考えられている。レビンソン（1978）は、発達が階層的ではなく平面的な過程であるという理論的立場から、「ライフサイクルを一連の時期または段階に分けてとらえる“季節”という考え方」を示している。人間の一生へのこの四季の比喩は、各季節がライフサイクルにそれぞれ欠かせない役割を持っていて、季節による優劣のない点に留意している。

このようなライフサイクルの考えは、発達特性を一方向的にとらえる発達段階的考え方、ひいては過去が未来を拘束するといった発達観から解放するものである。それは、段階理論のもつ、発達過程が時系列的な継起によって進行するという因果関係の連鎖からの解放である。河合（1983b）は、ある発達段階での問題を過去にだけ結び付けるのではなく、「人生後半への準備として生じているかも知れない」として、「未来の準備」と見なしている。さらに、小此木（1991）は、ライフサイクルの積極的な側面にふれ、年代の移りゆきはただ年を取るのではなく、潜在的にもっていた可能性が現れ、「いままでの自分と違った新しい自分（自己鏡像）と出会う」ことであると述べている。それはまた、発達が、前段階の否定と次の段階の模索という、弁証法的なプロセスであることを示すものである（理辺良，1989）。

従来の発達理論が、成人期前までの発達期間が主であったが、ライフサイクル論は、人間の一生をその範囲とすることを可能にするだろう。そしてライフサイクルは、いわゆる発達心理学と呼ばれている研究領域が、本来の意味するところの人間の生涯を視野にいれた、発達の全体像を描き出すことである。生涯発達心理学（Life-span Developmental Psychology）と呼ばれるものに対応するだろう。

## 2. ライフサイクル論としての『風姿花伝』（世阿弥）

ライフサイクル論は、人間の生涯を視野にいたした発達理論であると言える。おおよそ暦年齢に対応した発達期には、身体的、心理的な特質が備わっているものと考えられている。その様な意味から言えば、心理学の生涯発達理論（Erikson, 1963 ; Havighurst, 1953ら）以外にも、人間の生涯をいくつかの時期に分け、その特質、人生のあり様、理想等について述べた思想・宗教や文学のライフサイクル論がある。孔子の『論語』（為政）やヒンドゥー教の「四住期」は、その様な視点からライフサイクルの一つの見方として取り上げられてきている（Levinson, 1978 ; 河合, 1983b）。

世阿弥の『風姿花伝』は、いわばかかる意味でのライフサイクル論と言えるだろう。15世紀初頭の室町時代に書かれ、父観阿弥により伝えられたとされる能楽（猿楽）の伝書である。観阿弥が、日々の稽古で伝習者に与えていた能楽の遺訓である。演技論であり芸術論である『風姿花伝』は、七編より成っている。その第一編の『風姿花伝第一 年来稽古條々 上』は、芸（能）の美を発達の暦年齢を目安にして論じられている。

この編は、表題自体が示しているように、芸の修業という面からみたライフサイクル論であるだろう。能を演じる際に留意すべきこと、年齢にともなう芸の本質的な変容の過程について、身体と精神の側面及びそれらの相互作用の関係から、主な発達の段階に応じて述べられている。発達段階とその特徴を本文より拾い出すと次のようになる。

七歳 芸を初める —— 児童期

「心のままにさすべし」

十二、三より 時分の花（第一の花） —— 青年期

「能も心づく比（自覚が生じてくる頃）」

「二つの便り（子ども特有の持って生まれた姿の美しさと声のよさ）あれば、わるき事は隠れ、よき事はいよいよ花めけり」

「誠の花（稽古と工夫を重ねた後の芸力で、散ることのない美しさ）には非ず」

「時分の花なり」（稽古のいまだ充分に加えられていない、この年齢特有の一時的な美しさ）

十七、八より 一生のわかれ目 —— 過渡期

「声変わりぬれば、第一の花失せたり。體（テイ）も腰高になれば・・・」

「一期の堺こかなり（一生のわかれ目はここだ）と・・・」

二十四、五 時分の花・珍しき花 —— 成人期

「この比、一期の芸能の定まる初めなり」

「声もすでに直り、體も定まる時分なり」

「年盛りに向かう芸能の生ずる所なり」

「これも誠の花にはあらず。年の盛りと、見る人の、一旦の心の珍しき花なり」

三十四、五 能、盛りの極め ——人生半ばの過渡期

「この比の能、盛りの極めなり」

「もし（この時期に誠の花を）極めずば、四十より能は下るべし。・・・さるほどに、上るは三十四五までの比、下るは四十以来なり」

「この比は過ぎし方をも覚え、また行き先の手立をも覚る時分なり」

四十四、五 我が身を知る ——中年期

「この比より能の手立、大方変わるべし」

「それに附けても、よき脇の為手を持つべし」

「能は下らねども、力なく、ようよう年〔闌(タ)け〕ゆけば、身の花（身体的な美しさ）も、外目の花（観客の目に映る美しさ）も、うするなり」

「もし、この比まで失せざらん花こそ、誠の花にてあるべけれ」

「かように我が身を知る〔心〕、得たる人の心なるべし」

五十有余 得たりし花（老骨に残りし花） ——老年期

「誠に得たらん能者ならば、・・・物数をば早や初心に譲りて、やすき所を少な少など色へてせしかども、花はいや増しに見えしなり。これ、誠に得たりし花なる・・・」

（世阿弥『風姿花伝』（岩波書店）より）

ここに述べられている芸能論は、「能」という芸事に限定されてはいるが、そこには、筆者たち（観阿弥・世阿弥）の発達観が込められており、人生の発達プロセスが強く反映されたものになっている。身体的成長とその年齢段階に適正な訓練（稽古）のやり方、進む方向の可能性とその選択、アンサンブルとしての演者間の関係（ワキ・シテとの）への加齢による変化とその重点の移行の重要性。それは、能楽が肉体表現を基本的な要素とする舞台芸術であるため、身体的な発達に強く規定されていることによるものと思われる。そしてなによりも、それぞれの発達段階を特色づけている芸の特質と年齢による変容とその完成（円熟——「誠の花」・「萎れたる風体」）は、ライフサイクル論と通底するものであるだろう。

### 3. ライフサイクルの歴史的相対性

人間は、身体をもった生物であることは言うまでもない。「誕生」から「死」に向かって一方通行の道を生きていく。この生物的な生命の移行からはのがれようがないが、同時にこの「身体性」を括弧付きで生命から一時的に引き離して生きられる唯一の存在でもあるだろう。それは、人間のライフサイクルが必ずしも生物学的な生命支配に基づいてはいないことを意味している。『風姿花伝』の場合は、舞台芸術ゆえ身体性を基盤としている。そして、特定の目的（能楽の芸を極める）をもっているため、ライフサイクルでの暦年齢による発達段階がより明確になっていると考えられる。



ボーダレス化と現代の時代的要請が、ライフサイクルの区分をあいまいにしていることをすでに指摘した。それに加えて、発達段階が実体的なものではなく、発達段階の長さや各発達段階の概念そのものも時代の流れのなかで変容している。エリクソン（1982）は、この発達期の歴史的相対性の問題の例として、老人期を取り上げている。近年の高齢者（老人）の増加が、老人期の「発見」をもたらし、「選りぬかれた一握りの長老」から「大量の年長者の群れ」へと変化し、老人期の再定義が必要になったことをあげている。

このようなライフサイクルのなかでの発達期のもつ意味や位置づけの歴史的な変容は、老人期以外にもさまざまに指摘されてきている。その一つが、アリエス（1960）の『＜子供＞の誕生』での考察で、ライフサイクルにおける児童期の登場である。乳幼児期は別として、6、7歳をすぎると「小さい人々」としてもはや大人からは保護されず、大人と同様の生活をしていく。そして、ライフサイクルにおける「児童期」の概念は、産業革命という大きな社会変革の影響のもとで、近代的な家族や学校制度の出現によって登場したものである。

本田（1982, 1993）は、法律的にも学問的な発達期にも規定されていない「少女」期の存在に注目している。そして、「少女の誕生と解体」は、文化的制度としての発達期の存在のあいまいさを指摘したものといえるだろう。彼女は、ライフサイクルにおける文化の制度としての発達段階の虚構性を鋭くつく。「少女」は、1920年代の「感受性が活気をおびていた時代」に誕生し、「イメージの世界にすみ」、そしてやがて解体することを内包した常にゆれている「現象としての発達段階」とである。

また青年期は、アリエスの研究からも明らかなように、近代になってから登場したものである。産業社会への歴史的変革にともなう、都市化と工業化による教育制度の出現によって、第一次世界大戦後の社会不安の中で問題化したため注目される発達段階となった。かつて、青年を境界人（Marginal Man）と呼んで、その発達段階のあいまいさを表していた時代とは、今日おおいに異なっている。青年期は、子どもからおとなへの単なる過渡期といった一過性のものではなく、その時期の長期化もさることながら、ライフサイクルの中でも独自の意義と特質をもつことが近年指摘されてきている（笠原, 1977, 1984; 福島, 1992）。青春期やセブエ、不登校、アパシー・シンドローム、自己愛型パーソナリティ障害等々の近年特に注目されている精神病理は、この発達段階に固有の問題の現れである。そして、このような問題の多発は、この発達期の歴史的な新しさでもあると言えるだろう。

歴史性は、ライフサイクルにおける発達段階の存在の有無とその特質に影響を与える。そして、ライフサイクルは、エリクソンの言う歴史的な相対性のなかで変容するものである。20年前の老人期の老人の概念は、今日とは異なっているし、20年後には、それとも違ったものになっているだろう。このことは、ライフサイクルが、生物学的な要因による区分よりも、社会文化的な要因による区分の優位性を示すものであると言える。

### 3章 柔軟いライフサイクル論へ

#### 1. ライフサイクルの開放性

現代のライフサイクルを考えるうえで、2章までに見てきたことから、留意すべき点がいくつか上げられるだろう。まず一つは、発達段階の社会的なボーダレス化である。イニシエーションに代表されるような社会・文化的な共同体としての発達段階への共通認識が弱まり、個々人のレベルに重きを置いた発達移行が行われるようになったことである。

第二点は、ライフスパンの長期化によって、発達段階の再構成を迫られていることである。ライフサイクルの歴史的な相対性からも明らかであろう。半世紀前と比べて25年から30年ちかく延びており、特に中年期以後のライフサイクルに占める割合が急激に増し、人類にとって生物学的にも新しい課題となってきた（Comfort, 1966）。

第二点は、ライフサイクルの方向性である。児童期までは、生物学的な成長下でのコントロールが強く、発達過程を明確に示し得る測定可能な発達特性を多くもっている。しかし、成人期、とりわけ中年期以降は、個々人の発達のレベルを位置づけることは非常に困難である。それは、成人期以後に発達レベルを位置づけるための測定可能な単一な発達特性がないことによるためであろう。さまざまな発達特性が、個々人の発達過程のなかに複雑に入り組んでいる。換言すれば、生物学的な暦年齢による方向からの発達過程のゆるやかな開放は、個々人のライフサイクルにおける個性化をもたらしていると言える。

「はじめに」であげた、「死」を受容した16才の少女のケースを考えてみよう。彼女は、生涯発達の最後にすべき発達課題を一般的には青年期である発達段階でそれを成し遂げている。いわば、大きく暦年齢を逆方向にこえた発達過程を歩んだと言えるのではないだろうか。西川医師のケースも同様であり、死を目前に据えた極めて厳しい発達状況のもとに、ライフサイクルを死から生の方へへと生きたと言えるのではないだろうか。それは、発達の階段を一つ一つ上がって行くのとは、反対の方向性をもつものである。

以上の諸点を考慮したとき、発達過程は、すぐれて開放的であると言えるだろう。発達における個人の積極性は、このライフサイクルの開放性を基盤として展開されると言える。これに対して、例えばフロイトの心理-性的発達理論は、かなり閉鎖的なものと言えるだろう。ライフサイクルの核心となる部分は、児童期までに形成されると考えている。そして、それまでの体験（主に性に関わる）が、その後の発達を規定するという（心理的外傷といった概念に代表される「幼児期決定論」）。人生を過去との因果関係で捉えていることから、「閉ざされた」発達観といえるだろう。また、ハヴィガースト（1953）の「発達課題論」は、各発達段階における発達課題を固定的にとらえており、課題がいわゆるノルマのごとくであり、先のライフスパンの長期化といった今日の状態からして、発達の閉鎖性をもたらしていると思われる。

児童期までの「他者への依存」を前提とした発達段階は別としても、青年期以後は、主体的でよ

り開放的なものであるだろう。とりわけ成人期以降の個々人の人生（生き方や価値観）の多様性は、この発達の開放性によってもたらされているのであろう。

## 2. ライフサイクルの同時性と連続性

既に見てきたように、従来の発達理論は、直線的な「近代的自我(大人の状態 (complete state))」の確立を目指した、上昇的で単一次元的な進歩思想を基盤としたものであった。しかし、今日の激しい時代の過渡期のなかで、ライフスタイルの価値観に多様化や個別化が拡大し、共通要因を特定することが難しくなっている。その一つが、発達年齢に基づく短期間の固定的な発達区分が、ますます困難になっていることである。この発達段階批判は、「目的」から「過程」への発達の意義の移行を示唆するものであるだろう（河合，1991）。先の『風姿花伝』にみたライフサイクルは、芸の到達点、芸の完成をめざす、「芸」という明確な次元をもった発達過程であった。それは「近代的自我」という人間の完成をめざした発達観と相通じるものと言える。それをいわばハードなライフサイクル論と呼ぼう。それに対して、現代は、「生き方」、「生きる目標」が多様化・個別化していると同時に、それがあいまいとなっている。笠原（1977）が指摘するように、「一人前」ということばに代表されるような、「これで十分という心理的ゴールがないという今日的不充足感」がある。それゆえ、「目的」から「過程」への発達の意義の移行は、「開かれた」、柔軟なライフサイクル論であるだろう。

発達は、前段階の否定と次の段階の模索という、連続性と変化が共存する弁証法的なプロセスである（理辺良，1989）ことを既にあげた。いわば、社会的で、公的な規範の枠組みが弱くなった現代では、発達は、発達段階の「連続性」と発達課題の「同時性」をより強くもつようになったと言えるだろう。発達の連続性は、発達段階がより緩やかに連続するものとする考えである。そして、発達の同時性は、発達課題を個別の発達として捉えるのではなく、発達課題相互間の全体的構造に重点をおこうとする考えである。そして、これらの概念の導入は、固定的で閉鎖的な発達段階理論から個人の発達を開放するだろう。

まず、発達課題の同時性について検討しよう。ライフサイクルは、身体的な限界を除いて、特定の要因（レベル）によって支配されないものと考えられる。ただし、一般的な意味において、特定の発達段階に特定のテーマがあることは明かである。青年期の自我の確立、中年期の家族の諸問題や老年期の＜死＞の意識のといったテーマのように。しかし、個々人の人生のありようは多様であり、暦年齢的に前後すると同時に、テーマにかかわる期間もすぐれて個人的なものである。また、発達課題自体が相互に関連しており、ライフサイクルへの影響力に軽重の違いはあるが、単一的で孤立したものではない。それはライフサイクルが、個々人のその発達期での全体的な人生のテーマとのかかわりであるからである。従って、同時性は、発達段階の区分での理論ごとの違いをある程度解消できるだろう。また、同時性は、発達課題がそれぞれ関連もなく並列的に存在するというのではなく、課題間の関係性について言及しやすくするだろうし、発達過程の複雑性と多様性をより

反映するものともなるだろう。

#### 4章 ライフサイクルの三次元モデル

##### 1. 発達段階と発達課題の交差

発達段階を系列的固定的に考えることは、特に成人期以後において、現実の発達状況にそぐわないことが示された。発達は、複数の発達課題（発達特性）が、いくつかの発達段階にまたがって相互作用をしながら同時に進行している。そこでまず、発達段階と発達課題を、発達過程において二次元的に交差するように位置づけることによって、二つの発達側面をダイナミックに捉えることができるだろう。それは、固定的な発達段階を開放的なライフサイクルに変えるだろう。

そして、この二次元的交差モデルの設定は、以下のような諸点をより明確にしてくれるものと考えられる。

1. 発達の多次元における同時進行性を明確にできる。
2. それぞれの次元における発達の諸要因の関係を明らかにできる。また、次元間の関係性をダイナミックに扱えうるだろう。関係性とは、異なる発達段階の構成員からなる集団（家族・学校・職場・遊び）の相互作用である。つまり、ある個人の発達上の位置づけが、他の発達段階の者との関係性のなかでとらえることが出来る。
3. 発達過程の具体的問題の位置づけと発達要因を明確に出来る。具体的問題とは、日常的場面での諸問題（ex.教育・老人・死 etc.）、つまりライフイベントである。それは、ライフサイクルのスケジューリング（予定表づくり）に資するものとなる。

発達段階は、その時期と期間において開放的であり、柔軟性をもったものである。また発達課題が、特定の発達段階のみに限定されず広がりと同時に性をもつことは、ライフサイクルの「連続性」と「同時性」の特徴としてすでに言及した。そこで、図1は、その特徴を\*（アスタリクス）の数として表したものである。

\*の数は、発達段階における発達課題とその重要性（中心性）を示す。いわば、出来事のタイミング・モデルを反映したものであるだろう。そして、ある発達課題が複数の発達段階にまたがる場合に、その重要性の変化を連続的に表示している。

図1のライフサイクルの三次元モデルは、三次元の構造によって、個々人をとりまいている〈個人—家族—社会—歴史（時代）〉のライフサイクルの各側面を一つの図として統合でき、そして、それらの関係性を明らかにできるだろう。そして、ある個人の発達状況がこの三次元構造のなかに位置づけることができると考えられる。つまり、個々人の発達のダイナミズムは、この三次元上に個人史（ライフコース）が創られていくプロセスであると言えるだろう。

図1 ライフサイクルの三次元モデル<sup>(1)</sup>

(暦年齢)	誕生	(2)	(4)	(12)	12	(13)	25	(15)	40	(25)	65	死
(発達段階)	乳児期	幼児期	児童期		青年期		成人期		中年期		老年期	
<b>【個人】</b>												
(1-1) 自己(意識)		*	**		*****		***		*****		*	
(1-2) 《死》の意識				*	***		*		****		*****	
(1-3) 身体(身体性) <sup>(2)</sup>	*	**	***		*****		****		***		*	
<b>【家族】</b>												
(2-1) 前世代									**		*****	
↑ <sup>(3)</sup>												
(2-2) 現世代家族(中年期を基点として)					*		***		*****		*	
↓ <sup>(4)</sup>												
(2-3) 次世代	**	***	****		*****		***		**			
(2-4) 夫婦関係(性)							****		****		* [****]	<sup>(5)</sup>
<b>【対人】(私的関係)</b>												
(3-1) 友人		**	****		*****		****		***		* [***]	
(3-2) 相談相手			**		***		****		*****		***	
					……する立場……				…される立場…			
<b>【社会】(公的関係)</b>												
(4-1) 学校		**	*****		*****		*				**	
(4-2) 職業(職業アイデンティティ) <sup>(6)</sup>					**		***		*****		*	
(4-3) 地域活動					**		**		***		****	
時代性(社会・経済・科学技術等)												

- (1) 三次元は、第1次元が発達段階、第2次元が発達課題、第3次元が時代性である。
- (2) 身体的活動に加えて、身体を意識的にコントロールできる程度を含む。
- (3) (4) 現世代家族の中年期を基点として、家族サイクルを示す。従って、他の個人レベルでの発達課題とは異なる。
- (5) [ ] は、特に女性において異なる場合を示す。
- (6) (1-1)の自己(意識)と結びついた発達課題である。

## 2. 発達段階の大区分

さて、図1に示したように、発達段階を大区分することによって、発達段階のゆるやかな連続性と柔軟性を増すことが出来る。それは、「死に直面」した人々をライフサイクルの全体のプロセスに「普通の人々」と同じレベルで取り込める。また、通時的な発達段階の誕生(「子どもの誕生」とその崩壊(「少女の時代」)、さらには各時代における質的な変貌(「子どものプロ化」)、といった歴史性(時代性)の次元も取り込めるだろう。

ライフサイクルの多様性は、従来のライフサイクル理論が単線的なのに対して、今日の個性化を

反映するような発達の複線化を促しているのではないだろうか。大区分は、その様な複線的なライフサイクルに、柔軟に対応できるだろう。とりわけ、中年期以降の多様なライフスタイルには。

ライフサイクルは、従来の発達段階のうえに、次の二つの大きな境界があると考えられる。第1の境界は、児童期までの段階である。発達の揺籃期であるこの発達の初期は、より原初的で生物学的な要因が主に発達を駆動していると言える。そして、青年期へと「他者への依存から自立へ」と発達の展開がおこなわれる。

第2の境界は、中年期以後の段階である。ライフサイクルのなかで、中年期に大きな人生の転換があり、いわゆる「中年の危機」の存在を多くの研究者が指摘している（岡本，1990）。中年期は、『風姿花伝』にも芸のうで同様の指摘があるように、ライフサイクルのターニングポイントであると言える。中年期は、社会的（家族、職場）には安定するのに対して、内面の不安定さが目立つ時期である。この不安は、それまでの上昇志向であった発達傾向が下降へと転換することによってもたらされるのだろう。未来への肯定的な予測が減少し（下仲，1988）、人生の意義を問直し、自己を再評価するといった内面的な世界との対話の時代（Jung，1960）となる。そして、孔子の言う「天命を知り、耳順う」と言った自己の役割の確認が行われる。

そして、この大きな転換を駆動するのが、＜死＞の意識ではないだろうか。＜死＞は、青年期の「抽象的な死」に対して、中年期にはいわば残り時間として生命の有限性を認識した時間的展望に立った、「具体的な死」として意識されてくる。それはやがて、老年期の「日常的な死」へとつづいていく。さらに、子どもの誕生と養育という次世代家族の生成と、老親のケアと葬送という前世代家族の衰退と消滅といった家族サイクルのなかで、＜死＞は、具体性をもったものとなる。

中年期以降のライフサイクルは、＜死＞の意識が主に発達を駆動すると言える。いわば、ライフサイクルを＜死＞という＜生＞とは逆の方向からとらえる視点が中年期からの発達に支配的となる。いわゆる、死によって生を逆照射することであり、ライフサイクルにおける＜死＞の意識化の重要な意義であるだろう。そして、ここにライフサイクルの第2の境界があると言える。

### 3. 時代性——第3次元

ライフサイクルの第3次元は、歴史的な時間の大きな流れである。そこには、流れの大きさや深さの違いによっていくつかの階層をなしていると考えられる。それらの異なる歴史的、時代的な流れは、ライフサイクルの発達段階及び課題のそれぞれの側面に異なった影響力を及ぼしている。

第3次元の全ての階層を扱うにはあまりにテーマが大きく、また、心理学の範囲を大きく越える。また本稿は、ライフサイクルの三次元モデルの構造の全体像を素描することが目的であり、紙幅の都合もあるので、ライフサイクルに最も直接的な影響を与えられ、と考えられる、「時代性」に焦点を当てて検討する。言うまでもないことであるが、「時代性」の背景には、歴史や文明があり、「時代性」を規定していることに留意するのは当然であろう。

時代性は、ライフサイクルの青年期以降に強く影響する。それ以前の段階（児童期）は、養育者

への依存が主であるため、時代性は養育者を通じて間接的な影響にとどまるだろう。

この時代性の影響力の大きな違いが、ライフサイクルの大区分の根拠の一つである。特に青年期は、直接的に時代性の影響を強く受ける。「世代模様」は、そのような社会化の中心的時期において支配的である価値観によって形成される精神構造である。そして、その支配的な価値観は、その時代の固有の色合いを帯びており、世代間によって違った精神構造と世代内での類似した行動様式をつくり出すことになる。

ライフサイクルを規定する時代の変動要因は、大きく三つに分けられるだろう。一つは、社会的変動で、戦争やイデオロギーや社会制度の改革である。一例をあげれば、第2次世界大戦による、戦中の軍国主義教育から戦後の民主主義教育への大きな変化は、個々人のライフサイクル全体に影響を与えた大きな変動であった。と同時に、それぞれの発達段階によって異質な影響を与えたものでもあった。児童期と青年期と成人期とでは、数年の発達段階の違いがそれぞれに異なったものとなっている。

社会制度では、「家」制度の改革が、家族のあり方そのものを大きく変革した。大日本帝国憲法から日本国憲法第二十四条への改革（1946年）は、「家族生活における個人の尊厳と両性の平等」をもたらし、さらに明治民法からの改正民法（1947年）の改革は、いわゆる「いえ」制度の廃止をもたらし、「世代家族の形態」から「一代家族の形態」への近代家族の変容をたどっている。ただし、制度面での改革と実質面での変化には大きなずれが存在している（布施，1993）。

第2の変動要因は、経済面である。経済の好・不況は、職業（職業アイデンティティ）が発達課題として重要性を増す青年期から中年期に主に影響する要因である。高度経済成長やバブル経済の崩壊が、ライフサイクルのさまざまな発達段階にある個々人に強い影響を及ぼしていることは、言うまでもないことである。

第3の要因は、科学技術の革新である。近代のめざましい科学技術の進歩は、生活様式を急激に変えていっている。戦後の日本は、先の経済的要因をも含めて、技術革新が、産業構造を転換させ、生活革命をもたらし、家族構造の変容とともに個々人のライフスタイルを大きく変化させた（経済企画庁編『国民生活白書』，1990）。また、ハイテク機器（コンピュータ・AV機器等）の急激な開発とその普及は、発達段階によって違った影響をもたらし、テクノストレスと言った社会問題も生んでいる。いづれの変動要因についても言えることであるが、変動が激しければ、ライフサイクルに与える影響が各発達段階でより大きく異なるであろう。とりわけ技術革新の要因は、今後ますますライフサイクルに世代間の違いをもたらすと推測される。道具としての技術機器の違いによるコホート（Cohort）が形成されて行くだろう。テレビの出現をきっかけにして、「新人類」と「旧人類」の世代差が生じているようにである。

これらの時代の変動要因は、歴史的には同じ時代的変動であっても、それを体験する個々人のライフサイクルの発達段階によって、かなり違った意味合いをもって受け取られるだろう。そして、時代性は、共時的な生活環境の違いに加えて、通時的な世代の違いをもたらし、より多様な個人史

を形成していくことになる。それは、個々人のライフサイクルの唯一無二の一回性と言うことであるだろう。

おわりに

発達研究は、客観的実証的データに基づいて、いわば「外側から」の探求がなされてきた。そのため、発達年齢が児童期、青年期までの研究が中心となっていた。発達段階別にみた学会発表や学会誌での掲載論文の調査（白井、1993）でも、成人期（成人前期）と中年期の研究数は、極めて少ないものである。本論文でも指摘したが、測定可能な発達特性を限定することが困難であり、個々人の生き方の個別性と多様性によるためであろう。言い替えば、青年期までは、研究者としての安定した立場から、距離をおいて客観的に発達を対象化できたのである。しかし、成人期以降は、その様ないわば科学的な距離を置くことが困難であることを示している。成人期以降の研究が、主に臨床研究の領域で成されているのは、そのことによると考えられる。そこで、発達研究の方法として、「外側から」のアプローチに対して、ライフサイクルの成人期からの内実を実感をもって捉えうる、「内側から」のアプローチが必要となるであろう。

方法論の検討に加えて、平均寿命の急激な延びは、ライフサイクルにおける中年期以後の発達期をますます重要なものにしてきている。発達段階理論の背景にある「生から死」の一方方向性では、発達を十分に捉えられなくなっていることは明かである。中年期からの＜死＞の意識に示されるような、「死から生」への方向の発達研究の視点が必要となる。そこで、ライフサイクルを大きく分かつ、発達の分水嶺である中年期を基点とするライフサイクル論を検討していくことが今後の課題となるだろう。

## 引用文献

- Ariès, P. 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*. (Éditions de Seuil, Paris) (杉山光信・杉山恵美子訳 1980『〈子供〉の誕生』みすず書房)
- 朝日新聞社 1993年8月10日 朝刊
- 朝日新聞社 1993年9月15日 朝刊
- Bell, D. 1973 *The coming of post-industrial society*. (Basic Books, Inc., New York) (内田忠夫他訳 1975『脱工業社会の到来』ダイヤモンド社)
- Comfort, A. 1966 *Nature and human nature*. (Pelican Books) (清水博之・小原秀雄訳 1991『人間生物学 新装改訂版』思索社)
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. (Psychological issues Vol.1, No.1, Monograph 1, International Universities Press, Inc., New York) (小此木啓吾編訳 1973『自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房)
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and society* (Second edition). (W. W. Norton & Company, New York) (仁科弥生訳 1977『幼児期と社会I』みすず書房)
- Erikson, E. H. 1982 *The life cycle completed: A review*. (W. W. Norton & Company, New York) (村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989『ライフサイクル、その完結』みすず書房)
- 藤竹 暁 1992 イメージを生きる若者たち 有斐閣
- 福島 章 1992 青年期の心 講談社



- 布施晶子 1993 結婚と家族 岩波書店
- 原 太郎 1983 花伝書考 未来社
- Havighurst, R. J. 1953 Human Development and education. Longmans & Green.
- 東山紘久 1990 児童期 (第V章) 小川捷久・斉藤久美子・鐘幹八郎(編) 臨床心理学大系第3巻 ライフサイクル 金子書房
- 日野原重明 1983 死をどう生きたか 中央公論社
- 本田和子 1982 異文化としての子ども 紀伊国屋書店
- 本田和子 1993 NHK人間大学 少女へのまなざし 日本放送出版協会
- Jung, C. G. 1960 The stage of life, in The structure and dynamics of the psyche, Collected works, Vol. 8. (Pantheon Books Inc., New York)
- 笠原 嘉 1977 青年期 中央公論社
- 笠原 嘉 1984 アパシー・シンドローム——高学歴社会の青年心理 岩波書店
- 河合隼雄 1983a 大人になることのむずかしさ 岩波書店
- 河合隼雄 1983b 概説 飯田真他(編) 精神の科学6 ライフサイクル 岩波書店
- 河合隼雄 1991 とりかへばや, 男と女 新潮社
- 河合隼雄 1992 子どもと学校 岩波書店
- 川瀬一馬 1949 校注花伝書(風姿花伝) わんや書店
- 経済企画庁(編) 1990 国民生活白書——人にやさしい豊かな社会(平成2年版) 大蔵省印刷局
- 栗原彬 1989 社会学とライフサイクル カスタニエダ・長島正(編) ライフサイクルと人間の意識 金子書房
- Levinson, D. J. 1978 The seasons of a man's life. (The Sterling Load Agency, Inc., New York.) (南博訳 1992『ライフサイクルの心理学』講談社)
- 西尾実 1965 道元と世阿弥 岩波書店
- 野村幸正・井上道雄 1985 サバイバル・サイコロジー 福村出版
- 岡本祐子 1990 自己実現をめぐって 小川捷久・斉藤久美子・鐘幹八郎(編) 臨床心理学大系第3巻 ライフサイクル 金子書房
- 小此木啓吾 1989 現代日本青年の価値意識 カスタニエダ・長島正(編) ライフサイクルと人間の意識 金子書房
- 小此木啓吾 1991 ヒューマン・マインド—愛と哀しみの精神分析 金子書房
- 理辺良保行 1989 序論「ライフサイクルと意識」の座標 カスタニエダ・長島正(編) ライフサイクルと人間の意識 金子書房
- 佐藤紀子 1990 女性のライフサイクル 小川捷久・斉藤久美子・鐘幹八郎(編) 臨床心理学大系第3巻 ライフサイクル 金子書房
- 島田裕巳 1993 イニシエーションとしての宗教学 筑摩書房
- 下仲順子 1988 老人と人格 川島書店
- 白井利明 1993 わが国における青年期から老年期にかけての研究の動向——主体性・関係性・歴史性という視点の必要性 教育心理学年報 第32集(1992年度) 52-60.
- Toffler, A. 1980 The third wave. (William Morrow & Company, Inc.) (徳岡孝夫監訳 1982『第三の波』中央公論社)
- 山田かまち 1992 悩みはイバラのようにふりそそぐ 山田かまち詩画集 など いなだ(編) 筑摩書房
- 山本多喜司 1992 人生移行とは何か(第1章) 山本多喜司・ワプナー(編著) 人生移行の発達心理学 北大路書房
- 山崎正和 1984 柔らかな個人主義の誕生 中央公論社
- 柳田邦男 1986 「死の医学」への序章 新潮社
- Winn, M. 1981 Child without childhood. (Pantheon Books, New York.) (平賀 悦子訳 1984『子ども時代を失った子どもたち』サイマル出版)
- 世阿弥 1958 風姿花伝(野上豊一郎・西尾実校訂) 岩波書店

